

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 282 号

2025 年 10 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28

山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「ピリピ書・コロサイ書講解説教」より (4)

生きることはキリスト、死ぬことは益

「私にとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」(ピリピ書 1 章 21 節)

私にとっては、生きていることはキリストを信じて生きているのであって、キリストが私のうちに生きたもうていることになる。そして死ぬのは益である。「益である」というのは、キリストと一緒にいる。この後に出てきます。死ぬことは、キリストに迎えられてキリストと一つになる、キリストと共にいること。すなわち、われわれが地上にいる間はキリストを信じている信仰でありますけれども、この世が終わって天国に行ったならば、今度はキリストと一緒にいて目

で見る。信仰ではなしに現実となりますから、益であるという。

## 天国の一瞥

「私は、これら二つのものの間に板ばさみになっている。わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストととともにいることであり、実はその方がはるかに望ましい。」（ピリピ書 1 章 23 節）

板ばさみになるというのは、両方から苦しめられていること。自分の願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいる方がはるかに望ましい。その方が幸福、その方がふさわしいですから、その方が自分は望ましいと言っているわけです。

この文章は、キリスト再臨以前に我々の肉体の生命が終わって天国へ行っている時の様子を、垣間見るような場所であります。そういう天国の生活については、聖書は沈黙を守っているようでありますけれども、ここにちらっと天国の生活の一瞥が出ております。われわれが聖霊をいただいて、我々の信仰が進むにしたがって、われわれにもこういうふうな天国の一瞥という特権が与えられるかもしれないと思います。

私が喜んでいるように汝らも喜べ

「そうならば、私が再びあなた方のところに行くので、あなた方は私によってキリスト・イエスにある誇りを増すことになるろう」（ピリピ書 1 章 26 節）

イエス・キリストにある誇り、信仰が増進し、喜びが増進して、「キリストにある誇りを増し加えることになるであろう」。すなわち信仰が増し加わるであろうということでもあります。

以上これは注解を要しません。読んだら分かる。字のままです。

このパウロの心境は、いかに高い、恵まれた、うらやましい心境か。自分の将来の運命について、人のことみたいに言っている。俺は将来どうしようと、重荷になっていない。軽い。これを読むと、他人のことみたいに言っていることが解かる。「キリスト者の自由」とルッターは言いますが、この世にあって、つらい患難の将来に向かっても、体は自由なような感じを受けます。これは誠にうらやましい心の状態です。

有名な大聖書学者クリソストム（347 頃—407）が「なんという壮大なる、偉大なる人生哲学か」と言って感嘆している文章があります。わたしは思うにこの偉大なる心境、この喜びは、この間プロ野球セリ

ーグで、優勝して喜んでいたヤクルトの選手たちや、ノーベル賞をもらって喜ぶ非常に素質のあるような、特別な人だけに与えられる喜びではない。このパウロの喜びは、聖霊を受けさえすれば、万人が、だれでも行ける。私でも行けます。聖霊が望んだら万人がいける。そういう喜びです。」

ピリピ書と言うのは、一言で言えば、「私が喜んでいるように汝らも喜べ」ということです。これは喜びでしょう。これは万人に可能です。

## 高円寺東教会の3義務

高円寺東教会の3義務の第1、それは祈りです。その祈りは日に4回やったらいい。朝起きるときは「今日一日、お守りください」。それから第2回目の祈りは仕事を始めるとき、「どうぞ今日仕事を始めます。神様お守りください」。それから第3の祈り、仕事が終わった時に「今日は仕事を終わらせていただいて、ありがとうございます」。第4の祈りは、寝るとき、「今日一日お守りくださいますて、ありがとうございます」と。第1の義務は祈りです。…

それから第2の義務は、自分の尊敬している先生の聖書の注解書を1ページ読むこと。

第3の義務は、毎日、自分のしたいことをするのではなく、なすべきことをなすべく試みよということ。出来なくともいいから、なそうと試みよ。ということをお話しましたが、今日はこの3義務を訂正します。

## 訂正後の3 議務

第1の義務は、祈り4回。この祈りはもっと簡単になった。「わが主イエスよ」と主の名を呼んだらよろしい。これは朝起きた時、寝るとき、食事の初めと終わり。それで日に4回、「わが主イエスよ」と5回言ってください。

ちょっと食事の時の祈りに付け加えてほしいのは、「どうぞ神様、この食事に感謝するようにしてください」という祈りです。たびたび申す通り、アルトハウスの説明によると、「感謝とはおかげであるということを知ること」だ。…ですから「この食事のおかげで私は生活させてもらったということを知る。そういう感謝ができるように」と食事の時に祈ってください。私も祈っています。

それから第2の義務、聖書の注解書を1ページ読む。これを訂正して、小西の「ロマ人への手紙別冊」を1ページ読んでください。

第3の義務は変わらない。

## 一つの霊によって堅く立て

パウロはピリピ人に3つの生活の仕方を希望した。「天国の市民として生活せよ」とはどういうふうな生活か、パウロは3つの具体的な方法をピリピ人に期待した、

その第1は、「そして、私が行ってあなた方に会うにしても、離れているにしても、あなた方が一つの霊によって堅く立ち」。原語は、「立て」という字であります。すなわち、三つのうちの第1の勧めは、「あなた方が、一つの霊によって堅く立て」。「立つ」という字が動詞の本動詞でありまして、これが第1であるとともに3つの全体とみていい。

そうですから、パウロの教えと言うよりも、聖書全体の教え「神の子たるの信仰、復活の望みに堅く立て」ということに尽きる。ロマ書全体を、数年かかって勉強しましたが、ロマ書を一言にして言えば、15章13節「あなた方は聖霊によって信仰を与えられて、そしてこの復活の望みに満ちあふれなさい」これがロマ書の結論です。「復活の望みに満ちあふれる」と言うのは、死んで肉体が終わる時にキリストに迎えられて天国に行って、キリスト来給う時に復活して永遠無限の栄光を受ける。永遠の命を得る。これが聖書の中心課題です。

## 苦難、苦しみについて

「あなた方は、さきにわたしについて見、今またわたしについて聞いているのとおなじ苦闘を、続けているのである、」（ピリピ 5・30）

信仰も痛みも賜物であるという。神様から下さる賜物であるから、その痛みは、私に合った痛みあるし、その痛みは、私がピリピにいた時にあなた方が目で見たと、今私が牢屋に入って苦しんでいることをあなた方は耳で聞いている。そうだから、今あなた方が受けている痛みは、私が受けた痛みであるし、また今味わっている痛みである。だから「その痛みに耐え忍べ」ということでもあります。そしてこの痛みによって信仰が鍛えられ、また救いが成就する。ここに、苦難、痛みのことを述べております。

この痛みは信仰の痛みではありますが、そういう信仰の痛みの他に、われわれが罪びととして人間の弱さから持っている人生の痛み、私はこれも含めてよいと思います。我々が日々出会う小さな、また大きい痛みでも、それは神様の賜物で、信仰を鍛え、救いを成就するものであると、こういうふうを考えて少しも聖書の意味と違わないと思います。

## 苦しみの唯一の解決の方法

われわれの信仰は、自分でこね上げたものでなく、神様からいただいたもの。それと同じく、我々の苦しみも神様からいただいたものですから、k0の苦しみを活用して、われわれの信仰も鍛えていただき、そしてその苦しみに打ち勝つ。ついに、その苦しみを喜ぶに至るまで、神様は導い下さると思います。実に人生にある苦しみの解決の唯一の方法は、今日パウロがしめしました「神の子たるの信仰、復活の望みに堅く立つ」というところにあるのです。

私は、人生の偉大さ Greatness のはかりは、われわれが人生の苦難に対して、どれだけ耐えうる力があるかにある、と思います。内村鑑三先生は晩年、「自分が人生において一番感謝することは、神が自分に苦難を下されたことである。この苦難によって贖いの信仰が分かり、永遠の命が分かった」とこうおっしゃって、苦難をお喜びになりました。

## わが主イエスよ、わが主イエスよ

以上が10年前、昭和43（1968）年7月14日に説明した箇所であります。その時には、私は「復活の希望に堅く立て」と言うだけの勧めしかできませんでした。また、ICCのピリピ書担当マーヴィン・R・ビンセント、並びにNTDピリピ書担当ゲルハルト・フリードリッヒの二人の大先生の注解書もこれ以上の答えは出ておりませんでした。私は「過去10年の間に、「主の名を呼ぶ」ということをロマ書10章12節、13節により教えてもらいました。その結果神の子たるの信仰、復活の望みに立つことはなかなか難しい。しかし、「わが主イエスよ」ということはやさしいということを知りました。

そうですから、今日この講演から、復活の望み、天国の望み、キリストに迎えられる喜びをもってお帰りにできる方は最も幸せな人ですが、それが出来ないわれわれ、私も、妄念のままで、「わが主イエスよ、わが主イエスよ、と主の名を呼んで、この会場を立ち去りたいと思います。マーヴィン・R・ビンセント、ゲルハルト・フリードリッヒ、こういう大先生もされなかったピリピ書の講解を日本の無名の牧師、小西ができた。わたしが日本人として生まれ、われわれの祖先が千年にわたって救い主の名をよんでいた、その祖先のお

かげによりました、こういう講解ができましたことを、御名によって  
感謝いたします。